共産主義者とアナーキストの対立　―3―

ホセ・ペイラッツ

神話破壊の喧伝者

一九一七年のロシア革命は現代政治史に最大の影響を与えてきた。それは少なくとも近代政治史におけるフランス革命のそれに匹敵するものだった。二つの革命の間には深い繋りがあるが、それはここでの問題ではない。その外交的経済的、さらに知的な反映以外で、社会政治分野に生じた影響は今も消滅していない。当時はごく一般的な線上にあらゆる明確な立場があった。まず革命それからボルシェヴィキのクーデターがあったことが、私たちの道徳的知的能力の大部分に恐るべき混乱を生じさせた。国内市場ととりわけ国際市場に定着した新しい赤色ツァーリたちの気むずかしい怒りは、一大民族に最大の屈従を強い、伝統的な自由主義的道徳の最大の破壊と、左翼の政党と組織の最大の不均衡を漸進的に生じさせた。権威主義の恐ろしい爪が隠されていたレーニン主義革命の煽動の第一段階では、前衛的知識人の頭を狂わせ、強固な社会民主主義を分断して選挙用のジャコバン的秘密結社に変え、混乱の種をまき、労働階級の道徳と闘争を保存していた大サンディカ組織を四分五裂させた。

スペインでもCNTとUGTにとって事情はそう変わらなかった。そしてこの一事が、さらに十九年後に私たちの国でファシズムが遭遇した命がけの抵抗を説明するのである。ファシズムは共産主義の健在の結果、王国への道をドイツに見出していた。因みに一九一七年から三〇年代に至るファシズムと共産主義という二つの現象の間の繋りも問題ではあるが、ここではそれも詳しく扱うことはできない。

一九一九年に、アナルコサンディカリストからなるCNT（全国労働連合）は、革命的気運と、資本主義諸国によるロシアの軍事的経済的包囲を耐えている第三インターに、慎重な加盟をした。慎重というのは、共産主義インターの第二回大会でスペイン代表が見聞することの結果によって最終的に態度を決定するまでの暫定的加盟だったからだ。スペイン代表のアレヘル・ペスタニヤは一九二〇年夏の第二回大会に出席し、当時はまだ親しみやすかったロシアの労働者たちと話し合い、アレクサンドロ・ベルクマン、エマ・ゴールドマン、ピョートル・クロポトキンらロシア生れの名高いアナキストたちの意

見を聴いた。またクレムリンでレーニンとも会見した。こうして得た印象をもとに彼は自分の組織の全国委員会に報告書を提出したが、それはおそらく初めての反神話的文書であった。

ペスタニヤが帰国しスペインの土を踏んだ瞬間から拘留されたバルセロナ監獄で報告書を作成している間に、ＣＮＴの別の代表団が、共産主義インターの加盟サンディカの赤色サンディカ・インターの第一回のためにモスクワに赴いた（一九二一年夏）。代表たちの大部分の運命はさておくとして、見る意思のある目をがっかりさせるに十分な、非常に具体的な事件が当時生じていた。クロンシュタットのアナキストが征服され、ウクライナではマフノ運動のリバータリアに対する人間狩りが続いていたのだ。レーニンとトロッキーは絞首台にふさわしい悪党たちの集団とそれぞれ情誼を通じていた。だが最も重大な問題はモスクワの監獄にいるアナキストと革命的社会主義者が宣言したハンガーストライキだった。スペインから派遣された代表たちはかなり強引にこのストに参加した。レーニンとトロッキーは「社会主義の監獄」にいる革命的囚人という恐るべき逆説を世界に暴露されるのを恐れた。ソヴィエト政府は、即時国外退去の刑で数人を釈放せざるをえなくされた。この約束を実行させることは最も骨の折れることだった。

結局、一九一九年のＣＮＴの大会で暫定的に採択されたコミンテルン加盟の決議は無駄になった。一九二二年にサラゴザで開かれたサンディカ全国会議（限定大会）で、加盟解消が決定された。新しい決定はサンディカ自身によってただちに実行された。

スペインの労働者の好意を得ていたもう一つのサンディカ本部はＵＧＴだった。ＵＧＴと社会党ではロシアの革命的事件に関する態度を決定するために二〇年代に数回の大会が開かれた。そのために、幻惑された青年の少数派によって重大な分裂の危機が何度か引き起こされた。それぞれ「第三インター」派と伝統派を代表するダニエル・アンギアノとフェルナンド・デ・ロス・リオスは、問題を解決するための情報をロシアで集めることを委任された。デ・ロス・リオスの報告はモスクワに好ましくない傾きをもっていた。この報告の中ではアナキスト、ピョートル・クロポトキンの助言が非常に重視されていた。

スペインの二つのサンディカ運動においてかなり重要な分裂の意図があり、そこからモスクワに味方し、あるいは呼応する共産党が誕生することになった。しかし、こうした情勢の変化と並んで、西欧で初めての反ボルシ

ェヴィキ的文献が存在したことは疑いない。それは間違いなくアナキストがその先駆者となったパンフレットや本からなっていた。それらを書いたのはアンヘル・ペスタニヤ、ルドルフ・ロッカー、ルイス・ファブリ、エンリケ・マラテスタ、その他、自称「プロレタリアの天国」を見捨ることができたロシア人亡命者たちだった。これらの文献はソヴィエトの神話を初めて告発したものだった。クレムリンの新しい主人たちも、ルーブル貨幣を注ぎこんだ宣伝用の効能書きをもとに苦い丸薬を砂糖でくるんで支持を得ようと苦心惨憺する密使や植民地総督たちも、それらを決して許してはおかないだろう。

世界のすべての国でソヴィエトの植民地化運動は大なり小なり効を奏した。馬鹿の一つ覚えのように「団結」を要求する者たちによって前もって分裂させられたりばらばらにされたりしていた諸政党の残りくずによって、共産党が組織された。

神は自分のものを知っている

スペインではＵＧＴと社会党は一九三四年まで植民者の圧力に抵抗し続けた。その年十月の革命事件は社会主義青年団の中にその最大のリーダー、ラルゴ・カバリェロを通してボルシェヴィキかぶれをつくり出した。ソヴィエトの軍事援助という脅しにのせられた内戦の間に、疫病はＵＧＴと社会党を征服した。

アナキズムに関しては、共産主義はいつも城壁に突き当っては牙を折るのだった。一九三四年のアストゥリアスの「コミューン」が続いていたあいだ、共産主義者と社会主義者は、不釣合いな勢力ではあったが、勇ましい宣言や布告や兵営のような組織方法などを試みるなど、先祖の時代からの血縁関係を証明した。明らかに彼らが多数派であるにもかかわらず、強情なアナキストのしぶとい小集団は、自由、原則としての民主主義ないし機能上のフェデラリズムの自由な合意、権威主義の胞子の確実な効果についての正式な告発という妄想を抱き続けた。

「正統の」共産主義者は社会党とＵＧＴの大会のあたりからはっきり現われてきた。同じマルクス主義の血統だったからである。「左翼」共産主義者（やがてカタルニヤ共産党とそれに続く組織、労働者農民ブロックとマルクス主義統一労働者党の中に登場するであろう者たち）は、アナキストではないがかなりの部分がＣＮＴの出身だった。神は御自分のものをたやすく識別なさる。というわけで、二つの勢力はもう一度マドリードとバルセロナに、というより半島の中心とカタルニヤの中心に、二極分解したのだった。

前世紀の七〇年代以来、政治的社会主義の牙城となってきたマドリードは、正統派共産主義の揺籃であった。アンダルシアと並んでアナキズムの揺籃であったバルセロナは、異端派共産主義を生んだ。この事実は非常に意味深長である。内戦の二年目を通じて、アナキストと左翼共産主義者は全体主義的共産主義とその統一勢力に対して同じバリケードから戦っていると非難されるのである。

「昨日まではそうだった……」

一九三〇年春、ＣＮＴがバルセロナで初の宣言集会を開いた時、演説者の一人は自分の演説を次のような言葉で始めた。「私たちは昨日まではそうだった…。」独裁制の秋の雨に育くまれた永遠の種、ＣＮＴは、新たな政治的社会的生命を得て甦えった。

アナルコサンディカリストの組織が集会に労働者の大群を集めている時に、あらゆる傾向の共産主義者はその勢力に落胆していた。内部にはすでに遠方の本部の指導に対する信頼の問題が生じていたが、ボルシェヴィキのクーデターの教義への忠誠を続けていた。その教義とは権威主義的中央集権制と鉄の規律と「プロレタリア独裁」であった。レーニンの退場とスターリンの登場、相続問題をめぐるスターリンとトロッキーの対立は、これらの流派が叫びだすのに幸いした。スペインではどの流派の共産主義者もＣＮＴの正式路線の正統制に疑問をもつことで一致していた。ＣＮＴの正式路線は一九一九年の大会の決議の変則的修正を非難された。

第三インター加盟決議が単なる会議で修正されてサンディカの一般投票に付されたことは違法だとみなされた。大会の決議は別の大会の決議によってしか修正できないのは確かである。しかし、マルチネス・アニドの「総督時代」の恐るべき弾圧から抜け出したばかりの組織が、一九二二年に大会を開けなかったことは余りに明らかである。フェデラリスト的厳格さからは、一九一九年の大会決議は依然として有効だった。だが、明らかに必要だった新しい大会が開催不可能だったという議論も、それに劣らず有効だった。サンディカは解放され、監獄は活動家でいっぱいになっていたし、アナルコサンディカリズムの最も強固な柱がなん百人も政府に傭われた殺し屋の手で斃れていた。今やバラ色の眼鏡をとって見るソヴィエトの現実は、無残な逆行的変化を遂げつゝあった。サラゴザ会議はロシアに行ってきた代表たち全員の楽観的な報告も悲観的な報告も聴いた。ここには以前よりずっと「ボルシェヴィキ」的になってロシアから帰ったイ

ラリオ・アルランディスも報告を行なうために出席した。会議は疑いもなく意思表明する資格があると考えた。だが非難者の議論を見るとそんなことは判断の規準にならないのだった。ホアキン・マウリンについても、さらに後のアンドレス・ニンについても、彼らはホルディ・アルケルとともにカタルニヤ共産党の創設者になるのだが、事情は変わらなかった。

こうして私たちは、中央集権的で独裁的な共産主義が、いらざる合法性と民主主義をもち出してフェデラリズムの合言葉の下に「ＣＮＴ再建」運動を開始するのを受けて立つことになった。この攻勢はＣＮＴをいささかも動揺させなかった。逆に、これらの太鼓持ちのやり方を一般の活動家がよりよく知り、憎まれ者により大きな力を与える助けになった。作戦の口実が加盟者の実数を調べることであったのなら、大失敗だった。わずかにカタルニヤ（トレリダ）においてのみ、「簒奪者」スターリンに対してレーニンを叫ぶ者たちが地域的成果をあげたのみだった。

ＣＮＴは伝統的なリバータリアの諸原則に忠実な方針を守った。フライ・ルイス・デ・レオンの言葉をまねて、「昨日まではそうだった……」と言い続けた。

「吠えろ、蹴散らしてやるから」

一九三四年の革命ののちまで、のんびりしたボルシェヴィキ指導部の遠国の諸党派は、敢えて戦術を変えようとはしなかった。芝居がかった破門によるいくつかの中央委員会の粛正は、党を沈滞した人形劇の舞台にしただけだった。新聞の騒然たるキャンペーンに表明された大衆の欲求は、突飛な指令を出す官僚機構を前進させず、民衆的ユーモアはそれを笑い草にした。件の実験室は一連の心理的駄洒落を演じてみせたが、狙った客筋から拒絶反応を受けた。実質のない上面だけの指令は敏感な嗅覚を怒らせ、爆笑の渦をしきりに巻きおこした。「一リットルの牛乳のために」という指令が真面目にとり合わされないのに、「社会的裏切者」と「アナルコ・ファシスト」に対する攻撃は労働者の神経をさかなでするという有様だった。とりわけ「統一戦線」と「基本的統一」への誘いで抱き込もうとした時はそうだった。時おり、ソヴィエト国家と独裁者プリモ・デ・リヴェラとのロシアの石油の悪臭ふんぷんたる取引きが、飾りたてた党派の軽快な前進を検疫隔離させた。これは、「社会主義」ポーランドの石炭のためにアストゥリアスでストを起こした炭坑労働者たちに、最近のサボタージュの正確な先例として指摘しておかなければならない。

トロイの木馬

一九三四年の革命的ゼネストの前夜、ＣＮＴの鉄壁の守りに阻まれ、社会主義者と共和主義者から嫌われた「モスクワ派」は、一九二二年にフランス共産党が組織したものをまねて、独自のサンディカ組織しＧＴＵ（統一労働総同盟）を発足させた。しかし、スペインではこの作戦は決定的失敗に終わった。とはいえ、一九三三年末の選挙の前夜にはラルユ・カバリエロ自身がトロイの木馬に門戸を開放したのである。真面目であったにしろ戦術であったにしろ、当時彼を冒していたレーニン主義の熱病は、一九三六年の選挙で一層激しく再発した。結局、スペイン社会党はあからさまな分裂に至ることなく、一触即発の分裂の危険をはらんだまま三つの潮流に分かれた。中道および右翼の分派に対抗して、カバリェロは社会主義青年団の支持を得、その自他ともに認めるリーダーとなって、洗練されたボルシェヴィキ的風格をもつ革命運動に専念した。その頃初めて、彼のためにモスクワ崇拝者たちが苦心して作っておいた「スペインのレーニン」というあだ名が使われた。トロイの木馬は彼が社会主義青年団と共産主義青年団の併合を許した時に自由に出入りできる扉を見出した。彼は若い（といってもそれほど若くはない）共産主義者を数十人吸収することはたやすいことだと考えた。そして二カ月もするうちに、吸収する側の者が、相次いで起こった事件の掩護もあって、吸収されてしまっていた。共産主義者は、かって空しく求めていた紹介状をＵＧＴにも見出した時には大喜びした。一九三六年の選挙のための人民戦線に正々堂々と入った時には、数カ月前まで鳴かず飛ばずだったのに六つの議席が贈られたのだった。

軍事用語での内戦すなわち七月十九日にカタルニヤでアナキストによって開始された社会革命は、重大な国難に直面した。共和主義者の反撃が割引かれたことである。共和党は洞察の欠如と憶病と引っ込み思案と反人民的偏見と、武装した民衆の潜行によって、事実上権力を失っていた。

同じ憂慮は西欧の民主主義諸国の間にも広がった。武器の火急の必要は共和国の運命を唯一の援助者スターリンの手に引き渡した。

ソヴィエトの神話の復活

卒直だが効果のないメキシコの援除を除くと、情熱的で英雄的でさえありながらフランコの後見者ヒトラーとムッソリーニに対してはまるで無防備な反ファッショ人

民戦線に、救援物資を提供する用意のある国際的大国は、ソヴィエト・ロシアだけだった。だが、「ロシアの人民からスペインの兄弟への援助」という神話は現代史における最大の強請となった。この神話の助けを借りて、極く小さい共産党は、従来の政党や組織に加盟しようのなかったあらゆる種類の不審分子で党員数を水増しした。スペイン共産党は、私たちの戦いの最初の数カ月で、革命的決算から身を守ってくれる身分証明書を絶望的に捜し求めていた何十万もの得体の知れない人間たちの徴兵所となった。

好ましからぬ人物たちの大群を堅気の人間に変えた奇跡については共産党に感謝してもよかっただろう。だが、人間の精神における倫理的変革を推進することは、野心的な入党勧誘政党の打算のうちになかった。共産党はいかなる代償を払っても、操作できる大衆を必要としていたのだ。

すべての組織と政党が、ああいう状況では、伝統的路線に大なり小なり忠誠を守るために、最大限の加盟勧誘運動をした。用意のある豊富な酵素がそれを可能にした。だが共産主義者は決定的な方針さえ持っていなかった。彼らは酵素も持っていなかったが、スターリンが彼らの援助のためにスペインに送った数百人の「技術者」が、その役割を何倍にも果たした。

ソヴィエトの武器援助の神話に続いて、共産党は右への開放の戦術を展開した。まず革命的事業を告発し、戦争の唯一の目的は軍事的勝利と民主主義的議会主義的共和制の再建であると宣言した。この「日和見主義」路線の中で（不本意ながら共産党に入党した者はみな、「日和見主義者」の名目の下にそうしたのである）、ブルジョアの屑や（カール・マルクスとスターリン自身の憎悪する）「プチブル」や、革命的民衆に借りのある反動的地主が党を膨脹させた。それらの屑の吹溜りになった時、共産主義者たちは新しい党員の卑しい関心を（抑圧するどころか）喜ばなければならなかった。揚句の果てが、革命的実現、すなわち、バーネット・ボロテンの言葉で言えばソヴィエト革命も含めてすべての現代革命の中で最も徹底的で独創的な性格を示したアナキストの英雄的な集産化と社会化とに対する集中攻撃だった。

共産主義は再度スペインとスペイン・アナキズムにぶつかって、その国際的主導権を奪い、革命の地図を塗り変えた。クロポトキンの助言に従って、スペインのアナキストは、圧倒的な戦争の空気に呑まれながらも、「革命をいかにしてなすべきでないか」だけでなく、革命をいかにして下部から、下部によって下部のためになすべ

きかをも学んでいた。

内戦を通しての共産主義の反革命的態度は、「味方の」民主主義諸政府を革命によって脅かすよりも安心させるため、また無法者や「不逞の徒」が支配しているのではなく、スペイン政府が掌中のあらゆる民主主義的手段によって支配しているのだという印象を国外に与えるための戦術だったとして、歴史的に正当化しようと試みられてきた。私たちが勝利のために必要としていた民主主義諸国の軍事援助を得るための手段だったという口実が使われている。金を握っている大国が、自国の工場や鉱山や鉄道網を接収する者に援助を与えるわけがなかった。

しかし、どのたわ言も共産主義者自身の破廉恥な行状の説明にはならなかった。たとえば、共和国のあらゆる民事組織と軍事組織を通して猛威をふるった入党勧誘運動。スペインにおけるソヴィエトの植民に関する大々的な宣伝活動の誇示（集会や、舞台衣裳のような服装で槌と鎌と巨大なレーニンとスターリンの肖像で飾った凱旋門をくぐっていくデモ行進など）。人民委員会と赤い星のマークを付けた軍服とを持つソヴィエト式に組織された正規軍。国家のあらゆるレベルにおける「顧問」の存在。最後に、忠誠派地区全体における独自の秘密監獄と捕吏と暗殺によるスターリンの政治警察組織の設置。他国の捕虜になった国家という印象はどうしてもぬぐえなかった。

一九三七年五月、クロンシュタットーバルセロナ

共産主義者はブルジョワ共和主義政治家を次第に中立化することに成功した。社会主義とＵＧＴからの改宗を徹底的に推進した。社会主義青年団との合併の戦いに勝った。特にカタルニヤで右翼とプチブルの殺到によって党を大きくすることに成功した。（ちょうどロシアに保管されていた）スペイン銀行の金で割高に支払われたロシアの武器は、党員の部隊か党員に支配されている部隊に優先的に送られた。親父スターリンの「友好的態度」に対する余儀ない感謝が、国家の機関や軍事機関や、前線の大部隊や、ごく例外的には後方の警察組織にも、彼らが浸透するための鍵に利用された。

だが、もっと大事なものが彼らの手を免れた。彼らの伝統的な敵アナキズムに代表される広大な陣営である。それは二百万に近い加盟者と、集産化され社会化された数千の経済企業体と、いかなる全体主義的気配をもイデオロギー的に敵視する数万の活動家と、前線における十五万丁の銃、そしてバリケード戦で奮闘しているサンディカ組織を抱えていた。

ボルシェヴィキはロシアで反対者を一人一人排除することによってのし上がることができた。メンシェヴィキ、社会革命党、そして最後に最も直接的な敵アナキストを。一九二一年のクロンシュタットの戦闘は全体主義的共産主義の勝利、革命の墓場であった。

スペインでも事態は同じ道を辿っていた。すでに述べたような成功に、「集産主義者のお祭り騒ぎ」や、ＣＮＴとＰＯＵＭの民兵のいわゆる無規律、彼らの指令に従わないすべての者の公的機関における仕事に対する不断の中傷キャンペーンが続いた。ファシストの軍事反乱への加担や共謀を後悔した反乱分子の裁判を始めようとした。それらの分子の未亡人や遺児でデモ行進を組織し、入党勧誘の野心の放従さを敢えて制限しようとしたラルゴ・カバリエロに、首相として、また陸軍大臣として責任を負わせようとした。

打撃を与える好機とみた時には、バルセロナのテレフォニカの建物を武力で占拠するという挑発行為に乗り出し、そのためにカタルニヤ政府の突撃警備隊を使った。ＣＮＴの活動家たちは武器をとって応戦し、カタルニヤの首都では市街戦の一週間が続いた。アラゴン戦線の兵士たちが敵前の持ち場を捨てて市街戦に参加するという不測の事態が起こりかねなくなったために、ＣＮＴ－ＦＡＩの責任者たちは休戦を支持した。その時、共産党の大臣が政府危機を挑発し、結局、社会党内のカバリェロの反対者のために彼は政治的に排除され、彼を支持したＣＮＴの大臣たちも辞任した。

作戦の第三段階は、バルセロナのバリケード戦に参加したＰＯＵＭに対する警察力による弾圧だった。この小さい党の指導者アンドレス・ニンは、ＣＮＴやリバータリア青年団の数十人の活動家たちと同じく、スペインのＧＰＵの洞窟に永遠に姿を消した。同じ年の八月に、共産党の指揮官リステルに率られた第十一師団は下アラゴンの農民の集産体を武力で解散し、アナキストの影響下にあった同地方評議会を倒した。その間、他の共産党部隊は同戦線の後方で同様の暴行を働いて、戦線を守っている部隊の間に士気弛緩の種をまいた。この士気の弛緩の空気が、わずか数カ月後にアラゴンの全解放区とカタルニヤの一部への敵の侵入と共和国地区の分断を招いた。この攻勢の第二段階は一九三八年十二月に開始され、一九三九年二月上旬には勝ち誇った敵はカタルニヤ全土を侵略して、フランス国境沿いに部隊を配置した。その頃、ヒトラーとスターリンは第二次世界大戦を生じさせるだろう有名なポーランド侵攻協定を準備していた。ドイツ・ファシズムとの協定に忠誠をつくす共産党は、西欧の連

合国とのナチーファシズムの戦いを単なる帝国主義戦争と規定するのである。

アナキストの瞬時の反撃

内戦の終りに、共和国軍隊の希望がすべての地平で閉ざされた時、アナキストはいまだに忌わしいネグリンを推戴する共産党政府を倒す陰謀を企てた。一つのクーデターが別のクーデターを阻止した。報復のために共産党の数個師団がマドリード付近の戦線を放棄してカサド大佐のフンタに全滅させられた位置を回復しようとした。アナキストは第十四師団の逆襲で対抗した。二つの作戦部隊の衝突は首都の市街で歩兵隊と砲兵隊と戦車を繰り出して展開された。共産党部隊は制圧されたが、敵の強力な介入が両陣営を決定的に制圧した。

これは、アラゴン戦線の双方の部隊が今にも参加しそうになっていたバルセロナの一九三七年五月の衝突の結果だったとも言えよう。アナキストのリーダーから絶望的に発せられた「撃ち方止め！」の指令は、敵の軍隊に対する戦いの敗北的結末として一年半後までこの衝突を延期するために中止させただけだったのだ。

抵抗運動におけるアナキストと共産主義者

世界大戦の第二段階で、連合国がヨーロッパ大陸における第二戦線を準備中だった時、フランスでは市民グループの抵抗運動が真剣に組織された。共産主義者にその時ちょっとした努力を見せた。とりわけナチのローラー車がやはり戦線を変更して全速力でロシア領内に侵攻してからはそうだった。

フランスでは共産党は「帝国主義戦争」の常套語を急いで「民族独立戦争」に変えた。以来、イギリスとアメリカの飛行機が投下する軽機関銃をとって反ナチ抵抗運動に真剣に奉仕した。非常に的確な指令に従って、大規模な戦略的ー政治的目的のために彼らは「マキ」のグループの指導部をどうしても獲得しなければならなかった。

フランスに亡命したスペインのアナキストは、恐るべきヂレンマに直面した。抵抗運動を無視することは恥辱だった。かといって抵抗運動に参加すれば、すでにスペインの塹壕で経験ずみの、背後から暗殺される危険に断えずさらされなければならない。後者の決断を下した者の多くは、赤い党員証を受け取らなかったり横暴な指揮官にたてついたりした罪で山中で命を失った。

フランスが解放され始めると、この困難な状況はさらに進んだ。共産主義者でないフランス人の抵抗運動家が間近い勝利を待たずに自然に除隊し、あるいは最も有名

な者たちはより高い使命のための準備をしている一方、強大なフランス共産党に後援されたスペイン人共産主義者は「マキ」における軍事的優位を獲得し、その独占権の下に「マキ」を独立した軍事部隊に変えた。そしてスペイン国境へいい加減な軍事遠征を試みた。スペイン解放のための民族同盟最高フンタをつくって、亡命者大衆の中から「志願兵」を徴募することに努力した。この徴兵は時々馬糧徴発的な様相を帯びた。というのはあらかじめ幹部の確保されていた大隊に入隊するよう武器で強制されたからだ。

アナキストの鋭い目はまたしてもからくりを見破っただろう。だが、当時を支配していた政治的混乱のために、自分自身にも他人の前にも罠を暴露することは、犯罪的報復を果たすことになっただろう。さらに共産主義者の無茶な冒険によってアラン渓谷で生じた大損害を指摘しなければならない。

フランスを出発した共産主義者たちはスペインの山岳部のあちこちで（アルト・マエストラスゴなど）、ほぼ同時にかなり大規模なゲリラ部隊を組織することに成功した。一方、スペインのアナキストは都市ゲリラの方を選んだ。特にバルセロナでは武装したアナキスト・グループが数年間、ドイツのゲシュタポに習って訓練された体制側の警察力を相手に勝ち目のない戦闘を続けた。

レヴァンテ山中ではゲリラの作戦基地が、体制に追われるお尋ね者たちによって作られた。彼らの大部分は治安警備隊とファランヘ党員が多くの小村で行なった虐殺を生き延びたＣＮＴのサンディカリストだった。共産主義者は強固な国際的連帯を通じて、指導部から差配される援助を獲得することができた。そして、追いつめられた野獣のように山中を行き、報復という地味な理由と同時に助かるための唯一の手段としてゲリラを選んだ絶望的なグループを、鎌と槌の紋章の下に編成することに成功した。

しかしながら、問題の党の上層部は国際的な宣伝機関もゲリラによって補強するだけに決めていた。党派性、一層強化された教義性、テロによって盲従を強いる政治裁判と死刑の宣告は、自己批判の有無にかかわりなく、自白しようがしまいが「裏切者」を最後には松の木のてっぺんに吊すのだった。ファランヘ主義的軍隊と治安警備隊の統一部隊による掃蕩作戦はそれによって容易になった。賢明な者は飢えた狼のように斃れるのを承知で谷に下りて行った。

共産主義がより大規模な戦略目標のためにまたもや指令を変更した時、ゲリラは壊滅した。ファッショ体制と

共産圏諸国との通商協定の舞台が必要になり始めていた。

一九六八年五月

スペインは一九三九年の敗北によって幕を閉じるまでの二十年間、活動的アナキズムの最後の塞だった。同国におけるファシズムの勝利を早めたのはロシア人顧問の影響力の政治的非情さだったが、その勝利はその後三十年間近く、国際社会でアナキズムについてほとんど語られることをなくしたのだった。共産主義者はバクーニンの精神が葬り去られたと思って喜んだものだ。

だが一九六八年、突如として五ー六月事件が勃発したのである。ド・ゴール氏の政府は強力な体制を誇っていた五月に、いきなり揺さぶられた。この恐るべき揺さぶりはアナキズム精神に鼓舞された学生のただの騒乱がもとだった。これらの分子のある小グループが、労働階級や学生の間では共産党の宣伝が絶対的な影響力を発揮していたにもかかわらず、他の青年たちまで感化していった。政府の大失策を利用して、ナンテールの社会学部の小グループは等比級数的に実兵員を増やしていった。政府の盲滅法の弾圧は自由主義的な教授や知識人を革命的潮流の方に押しやった。左への氾濫を見た時、共産主義は驚愕した。そしてその機関紙は、煽動家の第一人者（ダニエル・コーン・ベンディト）を「ドイツ人アナキスト」として激しく非難するようになった。同じ文句は治安当局によっても使われた。双方の代弁者は「一握りの、あるいは一集団の煽動家たち」について軽蔑的に語っていた。

五月十日から十二日にかけて、最初のバリケード戦が起きた。警察の突撃隊と住民の応援を得た学生とが、催涙弾と輔道の石とで対決した。制服を着て武装したゴリアテに対する戦いを奮いたたせた謎の戦略家は若干二十三才の小ダヴィテだった。彼はフランス生まれのユダヤ系ドイツ人で、両親は恐るべき人種的迫害を逃れて故国を捨てたのだった。彼コーン・ベンディトはフランスに居ながら兵役を逃れるためにドイツ国籍を選んだ。これは共産主義者と政府から外国人煽動家とみなされる十分な理由になった。不名誉なレッテルを貼られ、ユダヤ人というレッテルまで添えられて彼はフランスを追放された。あらゆる破壊活動は外国人が煽動すると決まっている、という伝統的公式が適用されたわけだ。五月七日にはコーン・ベンディトを先頭に学生の大群（約五万人）がシャンゼリゼを威風堂々とデモ行進した。彼らはプラネタリウムで名高い愛国的記念建築物に着くと、反射灯を消して「インターナショナル」を合唱した。傷ついた

祖国の神聖を汚す張本人たちといっしょにされないように、彼らを非難する者たちは鎌と槌の旗を三色旗にとりかえた。その機関紙は、青年たちの革命を「挑発」と「冒険主義」の二語でののしり続けた。

五月十三日、警察の攻撃に抗議して期限つきゼネストが始まり、あらゆる職業の八十万人を動員した。共産主義者は憎たらしいコーン・ベンディトの除外をスト参加の条件にした。残された運動を自分たちの組織で支配しようという狙いだった。しかし、彼ら自身の戦列の最も若い層の脱党がその望みを遂げさせなかった。学生たちは先頭を進み続け、その時、赤と黒の旗の波が風に翻えったのである。アナキズムはエル・シドと同じ墓に埋められたと考えていた者たちは、驚きを隠さなかった。

翌日、革命的空気に意気昂揚した若い労働者たちはCGT（加盟者二百万人）の権力者たちの予想を裏切って一大無期限ゼネストを開始した。一千万人の労働者が工場占拠や自主管理の試みによってCGTを揺さぶった。ストライキに続いて宗教的告白の中で、あるいは学校のあらゆる学年で、外国人団体で、劇場や映画館やラジオ、テレビに象徴される塞で、ストに呼応する無数の地方主義的自治主義的運動が起きた。ペサンソーの古びた墓地でプルードンが地下から重い墓石を揺り動かしたのだった。

共産主義者は自分たちの封土とみなしてきた産業組織を戦闘的に強化しなければならなかった。手足と頭脳の感情的混合はどうしても避けねばならなかった。ルノー社の前で学生と共産党の突撃部隊の間に大衝突が起こった。警察隊はフレとソシャールに陣取った。

CGTの官僚的指導者たちは演説で「無益な自治管理方式」を攻撃した。権力はぐらついた。工場と大学が協力して一突きすれば、権力の均衡をくずすに十分だったろう。しかし、モスクワはあわてて何が何でも体制を支持するという指令を出した。そしてフランスから若干の国際企業を追い出してアメリカの影響からフランスを引き離した。クレムリンに指揮されない革命はすべて、またしても「冒険主義」なのだった。

革命運動を流産させても、掌中を逃れた支配権を回復したいという願望があった。政府の方は賃金の改善という餌を振りまいて運動を有利に導こうとした。CGTの指導者も同じ意味で物質的要求を勝ちとろうとした。政府は選挙の約束もした。「選挙？　裏切りだ！」と暴徒は叫んだ。ブルジョアの殿堂、為替銀行が焼き打ちされた。

終身労働者の指導者と雇用主は革命の爆弾を取り除く

ために社会問題省で会談した。交渉の中で、共産党はユダのように端した金で革命を売ることに最も熱心な者の一人だった。政府はこの商談を主宰しながら、譲歩が消費市場の物価騰貴によってすぐ帳消しになることを確信していた。

政府は息を吹き返した。多少とも御しにくかった一千万のスト参加者は労働者に復帰した。もはや安心して大学から占拠者を追い出し、スペイン革命のアナーキーの病源菌が再び活動し始めていた工場を資本家に返すことができた。

またしてもアナキストと共産主義者は対立し、またしても革命は、革命的詭弁を弄する饒舌家に裏切られたのだった。（完）

（今村五月訳）

野火

橋宗一君の墓

リベルテールの第45号（昨年の9月号）に、近藤真柄さんが「素面」第49号に書かれた文を転載した。その後朝日新聞でもとり上げ、この墓が二、三年内に取払われることになると聞いた。心ある者はこの墓の保存に立ち上がろうとしている。

八才の少年が大杉たちと共に殺された。悲憤の父のやるせない感情を「九月十六日夜、大杉栄、野枝と共に犬共に虐殺さる」の一句に托して刻みこんだこの墓碑、あの天皇中心主義軍部ファシズムの中を、よくも残っていたこの墓碑、これは庶民の憤懣の記念碑だ。これは残したい。真柄さんの所にはすでにそのための資金を送ってる人もあるという。同志諸君の支持を期待する。このことについては、名古屋の同志からの報告も次号にのせられるだろう。（三浦）

×

訃報三つ

宋世何君が淋しく死んで行った。祖国を追われ、日本でアナーキズム運動に尽した宋君、純真な同志愛で僕達に接してくれた宋君、しかも孤高の正義をつらぬいた宋君、宋君の霊よ安かれ、君の後に続く者を守れ。

朴烈君が北鮮で死んだと伝えられた。捕えられて北に行ったと聞いて、その後の消息はほとんど聞いていないが、金子文子と結ばれた同志として、日本の官憲の卑劣なデッチ上げで、大逆事件犯人につくり上げられた朝鮮の同志として、いつもなつかしく心に浮ぶ朴烈だ。

橋本義春君の敬父が亡くなられた由、心から哀悼の意を表する。（三浦）

×

名古屋の無政府主義研究会

名古屋の同志諸君が「無政府主義研究会」を開いて研さんをつんでいる。最近の会で「女性解放」問題をあつかったそうである。

物情騒然とした世相の中で着実な研究は、遠回りのように見えたとしても、結局は革命への最短距離であろう

参加希望の方は以下の住所に連絡を。（O）

名古屋市昭和区荒田町四ー二六ー四六六

×

黒戦断想　ー大島英三郎

大島英三郎君から「黒戦断想」をいただいた。身辺雑記といったもので、大島君を理解するために良いので少し手を入れて全部出す積りだったが増丁したのにすでにページが足りないから、事務的な終りの方だけを本号に出すことにする。他は別の機会に。（三浦）

○私の読書会は本誌でお知らせしましたが、この会に招待しているのは初心の求道者とカンパをくださる人だけです。見物人は来られては困ります。会合は一人でも二人でも十分なのです。来会者は電話（03ー322ー八七一七）で連絡の上に願います。

○一人でも真の自由の戦士が生れ、その生涯を権力と戦かうならば、それは言論出版集会等の合法面の活動だけでも、運動は新しい歩みに入るでしょう。赤連や内ゲバ等の手段は革命を後退させると思います。私は手近い所から始めるべきだと思います。たとえばこの雑誌をより良くするために原稿を送ることなどである。編集の都合もあるだろうし、ボツでも構わないと考えてである。発行費も大変だ。少しでもカンパを送ろう。同志の不幸をいたわろう。おたがいに負担をかけないようにしよう。岩佐さんは宣伝ビラを電車内で配るとき、老人等に席をゆずる若い人にやりました。

○私は無政府社会の実現は集産ではダメで共産によって可能だという小文を書くつもりでしたが、俗用と老衰でこのような老の繰言になってしまいました。後は清閑を得て書きたいと念願しています。